

聖書：創世記 3：20～24

説教題：いのちの木への道

日時：2019年11月10日（夕拝）

人間の最初の罪が記された創世記第3章。アダムとその妻は蛇の提案を受け入れ、「これさえ食べれば自分たちは神のようになれる！」と考えて、神が禁じた木に手を伸ばし、そこから取って食べましたが、彼らが夢見たようなことは何も起こりませんでした。むしろ目が開かれて分かったのは、神との正しい関係から離れた自分たちのあまりの惨めさでした。神になったどころか、恥ずかしくて恥ずかしくてとても耐えられない、取り返しがつかないような悲惨の中に彼らは自らを落としました。そして前回は神の宣告の言葉について見ました。女に対しても、男に対しても、報いとして厳しいことが宣言されました。この罪の結果、多くの苦しみが自分たちとこの世界に臨むようになりました。そこに書いてある一つ一つのことを今日の私たちも自分の身をもって味わっています。

しかし今日の20節に驚くべきことが書いてあります。そこに「人は妻の名をエバと呼んだ。彼女が、生きるものすべての母だからであった。」とあります。エバという名前は「生きる者すべての母」という意味であることがここから分かります。私たちはここを読む時、驚きを禁じ得ないのではないのでしょうか。アダムとその妻は、たった今、主から宣告の言葉を聞きました。罪の刈り取りについての言葉を聞きました。なのにアダムはその妻を「生きる者の母」と名付けたのです。普通この流れで考えれば、どんな名を付けると予想されるところでしょう。多くの苦しみについて語られたわけですから、これから生まれて来る「苦しみの子らの母」と名付けたとしてもおかしくない。「呪いの子らの母」でもおかしくない。あるいは12節で見たようにアダムが妻に責任転嫁する思いで今なお一杯だったら「災いを呼び寄せた者」「罪を招き入れた者」と名付けてもおかしくなかったかもしれません。しかし彼はここで妻を「エバー生きる者すべての母」と名付けました。なぜ彼はこのように付けたのでしょうか。それはやはり前回の15節の主の約束、最初の福音を信じたからです。そこで主なる神は女からやがて生まれ出る一人の子孫がサタンの頭を打つ、すなわち勝利を勝ち取るという約束を与えてくださいました。その方が罪に落ちた者たちを決定的に救い出してください。そうしてこの方に信頼する者たちは生きる。そのことを信じたのでアダムはその妻を「生きる者たちの母」と名付けたのでしょう。ここにアダムが福音を信じたことが示されています。これから確かに罪を犯したことによるある種の報いは刈り取らなければなりません。16～

19 節で見たさばきは撤回されません。それでも、それに先立って語られた 15 節の約束のゆえに、自分たちには希望がある。妻は子を産み、そこからやがて救い主が出る。その救い主によって自分たちは救われる。エバはそのような祝福をもたらす存在となる。女はそのように名付けられて何と嬉しかったことでしょうか。罪を犯した張本人なのに、「生きる者すべての母」という名を与えられたわけですから。アダムとエバはこうして大変な罪を犯しましたが、福音を信じる最初の信者となったのです。彼らは希望をしっかりと握って、その信仰をこのように言い表しました。神があわれみを注いで、彼らをこのように導いてくださったのです。

21 節にも注目すべきことが語られています。「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。」 この「皮の衣」にはどんな意味があるのでしょうか。これはまず彼らがこれまでまとっていたいちじくの葉を綴り合せた腰の覆いとの対比で考えるべきでしょう。いちじくの葉っぱでは、すぐに枯れてダメになってしまいます。それは彼らを守るものにはなりません。彼らの必要を真に満たすものにはなりません。彼らを助けるものにはなりません。これから罪が侵入した厳しい生活へ送り出すにあたって、神はそれに代わる皮の衣を用意してくださったのです。それはいちじくの葉で作ったものに比べてはるかに丈夫です。はるかに彼らの生活を保護してくれます。そして彼らに大きな安心と慰めをもたらすものとなるでしょう。

しかしこの「皮の衣」を用意するためには何が必要だったでしょう。これは動物の皮であったと考えられます。とするとこれを用意するためには動物の命が犠牲にされなければなりません。ここに初めて「血が流される」という出来事が行われました。人間が支えられ、いのちに生き続けるために身代わりの犠牲がささげられたのです。ここに神は罪人をいのちの犠牲という代償を通して救ってくださるというメッセージが示されています。多くの人はこちらにイエス・キリストの十字架を見て来ました。今後、旧約の歴史においては動物の犠牲が人の赦しと聖めのために必要とされます。しかし動物が人間の代わりになれるわけではありません。動物の血は、やがてささげられるまことの犠牲イエス・キリストの犠牲を指し示すものです。その最初の犠牲がここでこのようにささげられたわけです。

しかもここで神がその皮の衣を彼らに「着せられた」とあることにも注目したいと思います。何と優しい神のお姿でしょうか！神はこれを造って、ポンとその辺に置いて、

後は自分で着なさい！とされたのではなかったのです。神が作った上で神が彼らに着せてくださったのです。何と信じられないような神のお姿でしょう。私たちの救いはただただ神の恵みによります。神が必要なものを用意し、着せてくださることまでして、私たちが救ってくださるのです。

そうしていよいよ樂園追放となります。罪を犯した者として、そのまま主の園にとどまり続けることはできません。アダムとエバはこの祝福の園から追い出されます。特にその出来事は22節以降を見ると、いのちの木との関連で述べられています。「今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないように」と。これはどういう意味でしょうか。これは墮落後の人間には、そのようなことをする傾向があったということを示唆しているかもしれません。2章を読んだ際に触れましたが、園の中央にあるいのちの木は、おそらく善悪の知識の木から取って食べてはならないというテスト期間を経た後、永遠のいのちの状態に入る時の証印となるようなものとして、そこにあったと考えられます。しかし罪に落ちた人間は今後、この木に手を伸ばして食べようとするかもしれません。そうすることがないように！と神は心を用いておられます。

しかしここにも神の慈しみ深い御心を見て取ることができるのではないのでしょうか。もし罪に落ちた人間が、この木にも手を伸ばして、それを食べたならどうなるでしょう。それはその罪の状態です。永遠に生きることを自らに決定することにならないのでしょうか。もしそうなったとしたら、それこそ悲惨です。罪の呪いがかかった状態で永遠に生き続けることほど不幸なことはありません。神はそのような最悪のことが起こらないように、これを阻止されたのです。そこで人をエデンの園から追放して、いのちの木への道を守るために、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣をエデンの東の園に置かれました。こうして人は決してここに近づくことができないうようにされたのです。

さて、これでいのちの木にあずかる道は永久に人に断たれたことになったのでしょうか。そうではありません。神はこのいのちの木を消滅させてはいません。もうこれは使うことがないものとして廃棄していません。いのちの木への道を守る、とは侵入を守るということであって、その向こうにあるものは保存した状態に置かれます。いのちの木はなおしっかり保たれているのです。そして聖書を順番に前から読んで行って印象的に心に留めさせられることは、聖書の一番最後のヨハネの黙示録、しかもその最終章の22

章に「いのちの木」が登場して来ることです。黙示録 22 章 1～2 節：「御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。」 また 14 節：「自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の实を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。」 やがて神が導き入れてくださる最終状態、新しい天と新しい地において、私たちはいのちの木から取って食べることができるのです！呪われるものが何もない、それらがすべて取り去られた世界で、永遠のいのちを享受して、神と共に歩むように導かれるのです！エデンの園で失ったものを全部取り戻す祝福がここに 있습니다。これはこの創世記 3 章の後に記される聖書の全ページを通過して最後に私たちが到達させていただける状態です。そこまでの聖書のページに記されることは何でしょうか。それは一言で言えばイエス・キリストです。この方による救いのことです。それは 3 章 15 節で語られた最初の福音の具体的な展開と言えます。そこでよいよ明らかにされる救い主とその働きを通して、私たちは黙示録最終章に描かれている究極の幸いにあずかる者とさせていただけるのです。今すぐいのちの木にあずかる道は閉ざされましたが、神が備えてくださる救い主を通して、あのいのちの木にあずかる日の来ることを聖書は私たちに約束しているのです。

創世記第 3 章。人間が罪を犯したことが記された悲しい章でした。それによって取り返しのつかないような災いを自らに招き寄せた章でした。もはや人間には死と滅びしかないと宣告され、終わりとなってもおかしくなかった章でした。しかしそんなこの第 3 章は同時に何と驚くべき神の愛と恵みの光が注がれた章でもあったことでしょうか。罪を犯して悔い改めもしなかった最初の夫婦が、主の恵みにより頼んでいのちの希望に打ち震えています。その希望をしっかりと告白しています。またそんな彼らに神ご自身が彼らの恥を覆う手立てを講じてくださいました。そして今すぐというわけには行きませんが、神はいのちの木を保存し、聖書に従って歩む者に必ずその道を開き、やがてそれを取って食べる日の来ることを約束くださっています。私たちはこの神の限りない愛と憐れみに感謝して、御前にひれ伏し、神が与えてくださった方法に従いたいと思います。神はやがて来る一人の女の子孫イエス・キリストを通して、その方がささげる測り知れない犠牲を通して私たちに救い出してください。この救い主に信頼していのちの木への道を歩く者とさせていただき、やがて神が定められた最後の日、救いの完成の日に、そのいのちの木から取って食べるという究極の幸いにあずからせていただく者の歩みへ

進んでまいりたいと思います。